

奈良ホテル

古都奈良で近代和風建築を極めた 明治末期創業のホテル

奈良県の奈良ホテルは明治42(1909)年の創業。本館を設計した辰野金吾は、西洋文化であるホテルに、伝統的な日本の意匠を取り入れ和洋折衷の近代和風建築とした。ホテルは約110年を経た今も皇室や著名人など、多くの人に親しまれている。近代化産業遺産。



ロビーは洋風のホテルらしさを感じさせる吹き抜け。2階回廊に高欄、その下を折り上げ格天井風に飾るなど、和風の意匠が随所に見られる。



大階段から2階回廊へ擬宝珠高欄が続く。擬宝珠は第二次世界大戦時の金属供出後、陶器製に替わった。



真壁造の1階に対し、2階は柱を見せない大壁造。回廊を巡って展示された数々の名画が鑑賞できる。



1階「桜の間」も折り上げ天井の格式ある造り。大正11年に物理学者・アインシュタインが弾いたピアノがある。



御簾や組子が美しい箴欄間とシャンデリアで飾られた本館の客室「デラックスクラシック」。調度品も丁寧に手入れして使い続けている。



メインダイニングルーム「三笠」。二重長押、折り上げ格天井の空間に、大正11年のエドワード英国皇太子来館に際して新調され、近年、修復が完了したシャンデリアが灯る。

奈良ホテルは奈良公園に隣接して建っている。辰野金吾設計の本館は瓦葺き入母屋造の木造2階建てで、白漆喰仕上げの真壁風外壁に腰板を貼る。屋根の両端には鰐尾を載せ、妻飾りを家紋首とするなど、ホテルでありながら寺社建築を思わせる外観である。これは、明治27年竣工の帝国奈良博物館(現奈良国立博物館)がレンガ造の洋風建築だったため、当時の奈良の景観にそぐわないと批判を浴び、県議会が新築の建物は古建築と調和するよう決議したことも背景にあるという。

縁取りのような回廊の上に格天井が見え、春日大社の釣燈籠をモチーフとするシャンデリアが下がる。木造和風建築には見られない天井高、回廊、回廊へ続くカーペット敷きの大階段、加えて小屋組が洋風トラスであることも知られており、こうした洋風の構成に擬宝珠高欄や格天井など、日本の意匠をちりばめ、館内は和洋折衷様式としている。

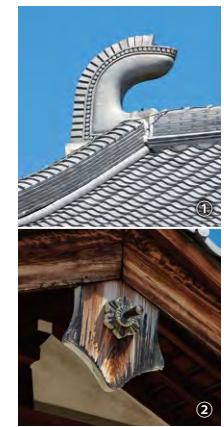
ティンダリングルームも造られていた。客室はベッドや椅子といった洋風の仕様だが、中には箴欄間や御簾をあしらった部屋があり、今も創業当初の趣を色濃く伝えている。また、フランス料理を供するメインダイニングルームも洋風の空間ながら二重長押を回し、蟻壁を設けて折り上げ格天井とする書院造の意匠を併せ持つ。奈良ホテルは明治期に西洋文化を近代和風建築として表現した貴重な建物である。2020年にはホテルの文化的価値に配慮した耐震補強改修工事が竣工。歴史ある建物を次の100年に受け継ぐ準備が整った。



鰐尾を載せた瓦屋根、白漆喰の外壁など、寺社のようなたたずまいが古都奈良の風情と調和している。ほぼ中央に車寄せを設け、宿泊棟は雁行して東に伸びる。



車寄せの柱梁はヒノキ、格天井は杉材。柱に打たれた釘隠しの乳唄(ちちばい)は寺院建築で見られる飾り。



①鰐尾 ②懸魚。火伏せの願いを込めた装飾とされる。



①鳥居型の飾り付きマントルピース。大正初期まで石炭を焚いてロビーや客室で使用した。②当時は数室分の煙・熱を集約し煙突から排気していた。



本館耐震補強工事に採用された
複層斜交重ね板壁

用語説明
【辰野金吾】工部大学校造家学科(東京大学工学部的前身)1期生。同校教授として、また設計者として明治・大正期の建築界に貢献。日本銀行本店や東京駅を設計した。
【真壁風】大壁造の外壁に化粧板を貼って付け柱・付け梁とし、真壁に見せている。
【家紋首】椀首(梁や桁の上に載せ、山形に組み合わせて小屋組みを構成する斜材材)の中央に束を立てたもの。
【箴欄間】縦格子や縦格子に2〜3本の横棧の入った欄間。書院造などで用いられる。
【蟻壁】書院や客殿で天井直下に設けられた丈の低い壁。
【乳唄】これも戦時中に供出したため木製で代用している。
【実別ぎ】一方の板の側面に彫った溝に他方の板に作った突起を差し込んで接合する方法。

奈良県奈良市高畑町1096
協力:奈良ホテル

